

エストuary

Estuary 038

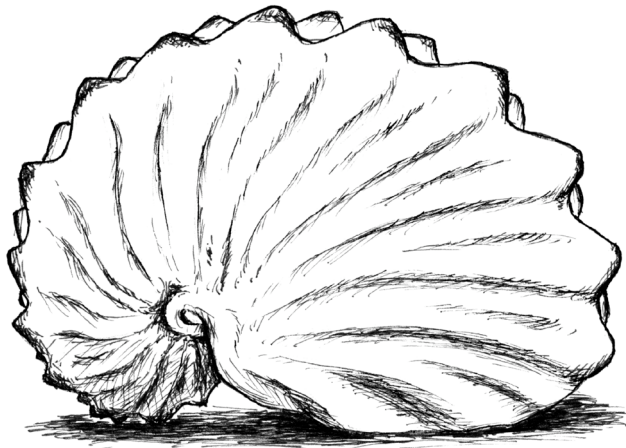
～いしかり砂丘の風資料館だより～

展示資料のひみつ

リターンズ

3/27まで展示中!

トゲというより「コブ」
数もアオイガイより
少ない。



アオイガイよりだいぶ小さい。
アオイガイは大きいもので20～30cm
になるが、タコブネは8～9cmまで。

■タコブネ (フネダコの殻)

Argonauta hians (Lightfoot, 1786)

八腕形目アオイガイ科

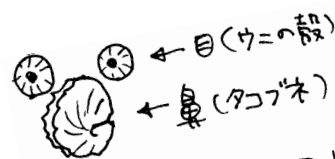
採集地 新潟県柏崎市椎谷

殻長 5.6cm

寄贈者 渡邊三四一さん、加藤一巳さん

タコブネ、別名フネダコ。温帯～熱帯の暖かい海を漂って生活するタコです。アオイガイの仲間で、同じようにメスが産卵・孵化のために殻を作ります。

だいたいの形はアオイガイと似ていますが、よく見ると違いがいくつもわかります。殻の色はアオイガイが白色なのに対して、タコブネは象牙色。放射肋（殻の表面のうねうねした凹凸）は太くて間隔も粗く、アオイガイでは鋭いトゲの列も、タコブネでは太くて丸く、トゲというより「コブ」。



↑
こんな感じで「漂着物アート」に
なっていた... 謎の生物の殻。
バラさせてしまっただけなんじゃない...

タコブネはアオイガイのように大量に漂着することはなく、めったに見つかりません。そもそも漂着の最北の発見記録は津軽海峡。ほとんど青森側ですが、北海道側で見つかったという情報もわずかにあります。

このタコブネは、新潟に行った際に柏崎市の学芸員からいただいたもの。もともとは“漂着物アート”の一部だったそうで、ウニや貝殻とボンドで接着されたままの状態！で持ち帰りました。 ■

(志賀健司 しがけんじ)

除虫菊の夢

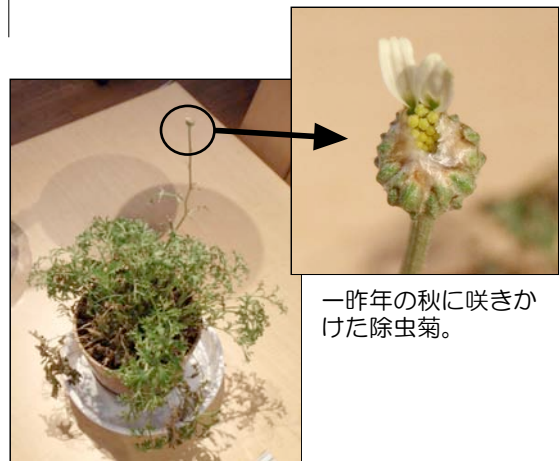
一昨年と昨年の5月中旬、資料館前の花壇が除虫菊の花でいっぱいになるのを夢見ながら、種を蒔きました。一昨年は何とか芽が出、秋頃ようやく大きくなり、蕾をつけたのが吐息も白くなりそうな11月初めのことでした。慌てて植木鉢に移し替えて館内へ。それから1ヶ月後、少し花びらが開き一輪でも満開の花が見られると期待したのですが、寒さのせいかあえなく枯れてしまいました。昨年は残っていた種を花壇と植木鉢に。芽は一つも出ず、私の2年に及ぶ除虫菊を咲かせる夢がしぼんでしまいました。

昨年の12月末、資料館の寄贈品展で展示する「マルキンクリーム（御化粧用クリーム・缶入り、年代不詳）」という資料を見せていただきました。特別にフタを開けさせてもらいクリームの匂いを嗅いでみると、小さい頃イタズラに祖母の鏡台の引き出しを開けたときに嗅いだような懐かしい匂いがしました。このクリームは、明治25（1892）年より石狩市の花畔で除虫菊を栽培し、それを使った蚊取り線香やノミ取り粉などの製造販売をしていた、金子清

一郎商店のもので。効能書きには“洗顔後に少量顔にすりこむと自然と美顔になる”“常に使用すれば色白くきめこまやかに”と今も昔も変わらない女性の心をくすぐる言葉が並んでいます。

当時どのくらいの女性が夢を描いてこのクリームを手にし、花開かせることができたのでしょうか。なんだか思いを馳せてしまいます。

（倉 雅子 くらまさこ）



一昨年の秋に咲きかけた除虫菊。

日本人はどこから来たのか？

－北海道編－

人類学や考古学において、最も注目されているテーマの一つに“日本人の起源”があります。先史時代に興味のない方でも「約3000年前に北九州へ渡来人がやって来たことで稲作が広まり、弥生時代が始まった。」と学校などで教わったことがあると思います。詳しい方になると「北海道と沖縄は弥生文化の影響を殆ど受けず、その後もしばらく狩猟採集による生活が続いた。」ということもご存じかと思います。

北海道と沖縄では弥生文化の影響が少なかったことから、これまではアイヌや沖縄人に縄文人の特徴が強く残っていると考えられてきました。しかし、近年のDNA分析を用いた研究では、異なる結果が得られているようです。そこで今回は、北海道の先住民族であるアイヌの人たちのルーツに関するお話をしたいと思います。

DNA分析の結果から、アイヌの人たちは縄文人よりはサハリンなどに起源を持つオホーツク文化人と近縁関係にあるらしいことが分かってきました。オホーツク文化

とは、5～9世紀ごろ北海道のオホーツク海沿岸部に栄えた文化で、主にアシカなどの大型海獣を獲って生活していたと考えられています。

国立科学博物館の篠田謙一さんによると、現在のカムチャツカ半島や北東シベリアの先住民にみられる『Y』というDNAタイプが、北海道の縄文人の骨からは検出されないにも関わらず、アイヌの人たちには2割程度存在しているそうです。さらに、北海道大学の研究チームがオホーツク文化人の人骨から採集したDNAを分析したところ、『Y』のDNAタイプを持つ個体が多く見つかったようです。

これらDNA分析の結果は、アイヌの人たちがオホーツク文化人のDNAを受け継いでいる可能性を示しています。今後さらに研究が進むことで、より詳細なルーツが分かることでしょう。

（千田寛之 ちだひろゆき）

《参考文献》

中村真哉（2009）消えた北方民族とアイヌの関係。Newton 2009年10月号，p127。

冬～春の講座・展示

野外講座

石狩ビーチコーマーズ／春

4月
開催

漂着物は海からの手紙。石狩浜の漂着物を観察、採集して、正体や起源をみんなで考えます。

- 日時 4月18日(日) 09:00～13:00
- 場所 砂丘の風資料館～石狩浜
- 対象 小学4年生～大人
(小学生は保護者同伴で)
- 定員 20人(先着順)
- 持ち物 長靴、手袋、帽子、防寒着、ビニール袋など
- 費用 無料
- 申込 4/3(土)～4/16(金)の間に電話で資料館(0133-62-3711)へ

開催
中!

テーマ展

資料館のお宝2010

昔の道具でも、海辺で拾った貝殻でも、資料館にとっては未来に残す大切なお宝!

この1年間にみなさんからいただいた資料や、採集した標本などを展示します。

- 期間 2009年12月27日～2010年3月27日
 - 場所 いしかり砂丘の風資料館
- ※資料館の入館料(大人300円、中学生以下無料)が必要です。

海の歴史

260万年前の「黒船来航」②

2009年、地質時代の第三紀と第四紀の区切りが変更されました。新たな境界の年代は260万年前(正確には258.8万年前)。基準とされたのは“北半球氷河時代の始まり”です。

今から260万年前、北米、グリーンランド、北欧など北半球に、なぜ巨大な氷床ができたのか——その最大の原因の1つは、北アメリカ大陸と南アメリカ大陸とを結ぶ地、中米のパナマにありました。

南北アメリカは今でこそ中米で陸続きになっています。しかし、かつて2つの大陸は離れていて、その間には“パナマ海峡”が広がっていました。太平洋と大西洋がここで通じていたのです。ところがプレートテクトニクスによる大陸のちょっとした動きによって、今から260万年前、北米と南米がくっついてパナマ海峡が閉じてしまいました。

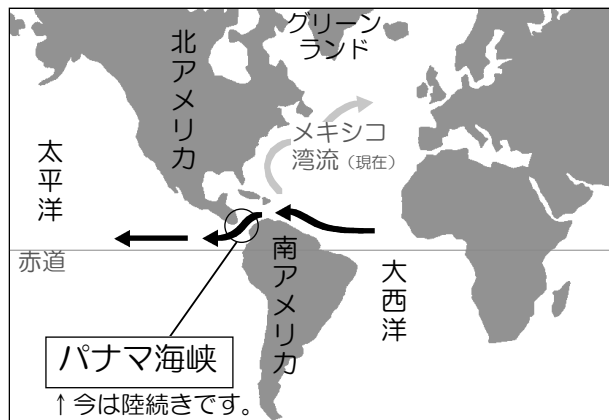
この変化は世界地図上ではとても小さな変化ですが、海流にとっては一大事件です。太平洋でも大西洋でも、本来、赤道の海には東から西へと向かう海流が流れています。パナマが海だった時代は、赤道大西洋の暖かい海水は太平洋へと抜けていたのですが、海峡がふさがってしまうと海流は北に向きを変えてしまいます。そうして

誕生した海流がメキシコ湾流。赤道の暖かい海水をカナダやグリーンランド、北欧など寒い地域に運びます。

暖かい水が運ばれば氷なんかできないだろう、と思うかもしれませんが、そうではないのです。暖かい水は大気にたくさんの水蒸気を与え、どんどん雲を作ります(寒い屋外で熱いお茶を入れると湯気がもくもくと立ち上がります。あの湯気は雲と同じです)。雲は寒い地域では雪を降らせ、積雪は夏でも融け切らずに積み重なり、最終的に巨大な氷床が北半球で発達したのです。現在も続く気候の大枠はこのようにできあがり、その寒冷な気候による圧力が当時の人類の大きな進化を促したと考えられています。

(志賀健司 しがけんじ)

260万年前まで、赤道大西洋の暖かい海水は、“パナマ海峡”から太平洋へ流れ出ていました。



氷頭 SALMON ㄱIND

2010年あけましておめでとうございます。本年もいしかり砂丘の風資料館、厚田区、浜益区の資料館をよろしく願いいたします。

昨年、札幌の高橋さんから、1900（明治33）年のパリ万国博覧会をはじめとする賞状などの寄贈がありました。これらは曾祖父で開拓使石狩缶詰所を引き継いだ高橋儀兵衛が、スモークドサーモンなどを出品して貰ったものです。現在資料の調査などを行っていますが、いずれも石狩市の歴史を知る上で欠くことのできない大切な資料です。また同時に、市内の田中さんから、高橋儀兵衛の経営した缶詰工場の鮭缶ラベルの寄贈がありました。そのうちの一枚は「氷頭」の缶詰ラベルでした。「氷頭」と書いて「ひず」と読み、サケの頭から鼻にかけての軟骨部分のことですが、ここの缶詰があったとは知りませんでした。「氷頭」の食べ方で一般的なのは「なます」ですが、この缶詰（水煮と思われる）はどのような料理に利用されたのでしょうか。また、不思議な

のはこのラベルの英語の表記です。「SALMON」はわかるのですがその次の文字は「ㄱIND」と印刷されていて、なんと読むのかわかりません。

最初の文字は、ロシア語の「ㄱ」（ゲー）のように見えますが、「ㄱIND」では意味が通じません。ミスプリントなのでしょうか。お知恵をお貸しください。 ■

（石橋孝夫 いしばしたかお）



■最近の「いしかり博物誌」（石狩市広報に連載中）

- ☞ 第105回：黄金山の「源義経伝説」（10年1月号）
- ☞ 第106回：伊能大図の謎（10年3月号）

編集後記

先日「お骨上げ」をする機会がありました。火葬後の遺骨を骨壺に収める、あれです。足の骨から箸で拾っていきますが、係の人がある骨を拾いあげて言いました。「喉仏の骨です」。あれ？そんな骨があったかな？（成人男子の喉に見られる喉仏は軟骨です）、と思ってよく見ると、この形、アザラシやキツネの骨格でも見たような…。それは、第2頸椎（首の2番目の骨）でした。形状が座禅を組んだ仏様に見えることから「喉“仏”」とされるそうです。へえ。故人から最後にトリビアを教えてもらいました。アザラシやキツネの体内にも仏様がいるんですね。（け）

いしかり砂丘の風資料館

開館時間	午前9時30分～午後5時00分
休館日	毎週火曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始
入館料	300円（中学生以下は無料）、 団体料金240円（15名以上）
交通	中央バス札幌ターミナルより石狩行き乗車、 「石狩温泉」下車、徒歩1分 （石狩温泉「番屋の宿」向かい）

エスチコアリ No.38

2010年3月5日発行

いしかり砂丘の風資料館

〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

TEL/FAX: 0133-62-3711

bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

<http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/museum/>